

平成25年度 研修会報告 「浜寺公園・バラ庭園の整備と管理」の概要

平成26年1月23日(木)午後、市内中央区谷町2丁目にあるNSビル4階の会議室で始まった研修会は、会員をはじめ、バラに興味のある多くの方々の参加で盛り上がりしました。

講師は、整備については当センター専務理事繁村誠人氏、管理については当センター理事の辻正信氏。計画地は当初、ハイカラなサンクンガーデンであったが、海岸線埋め立てから松も少なく、当時の設計者の了解の上バラ園に決定した。その背景、整備コンセプト等について、繁村氏は当事者として関与した体験をもとにわかりやすく解説され、参加者一同、納得した次第です。全体を庭園風に構成された思い、造成の工夫などは、特に興味深いお話でした。また、荻葉樹徳先生と繁村さんの当時のやりとりに、感心したものです。

現在指定管理者として日々バラ庭園にかかわっておられる辻氏からは、まず、世界的なバラ管理の環境配慮の現状について報告があり、無農薬に近い取り組みの実情に目を奪われました。次いで、バラの病害虫駆除のあれこれ、病害虫に強い品種改良の現状と苗木の入手難さ、耐寒性・耐暑性改良の工夫など、初めて聞く話に聴衆は最後まで引き込まれてしまいました。単に指定管理者として管理運営を担当するという立場以上に、バラを愛し、バラ庭園に思いをかける辻氏に圧倒されました。

あっという間に予定時間である2時間が過ぎ、活発な質疑応答や意見交換もあり、大変有意義な研修会であったと思います。

その後、交流の会場を国際造園研究センターに移して、一部の研修会参加者も加わって、賑やかで楽しい四木会(毎月第四木曜日午後四時から行われる会員中心のサロン、親睦会)が遅くまで続きました。

(糸谷 正俊)



通常総会

平成25年6月24日午後3時から、NSビルにおいて平成25年度通常総会を開催した。正会員59名の内過半数の44名の出席となり、本総会は成立し、服部理事長を議長として、提案された平成24年度事業報告および決算報告書、平成25年度事業計画案及び収支・支出予算案、定款の変更ならびに総会議決事項の委任は原案どおり可決された。総会終了後、前理事長の清水正之理事により、「大阪緑の都市計画の原点 - 大屋霊城の功績 -」について講演があった。

編集後記

わがセンターでは昨年顧問の今里忠雄氏が亡くなられたのに続き、この3月には服部明世理事長、5月には梅澤清太理事を亡くし、時の不運を切に感じざるを得ません。再度この場で哀悼の意を表します。センターの事業方針として「故きを温ねて新しきを知る」の精神を掲げ、観る機会の稀な大徳寺「弧蓬庵」や山口「月の桂」の庭園を見学。大阪府の浜寺公園のアーカイブ整理や、大阪都市緑化フェアへの出展企画参加など、会員の方々や他団体、大学との協力の中で進めてきました。亡くなられた方々の意思を引き継ぎながら進めていきますのでこれまで以上、背中を押していただけるようお願いいたします。

◎ ご入会の案内

当センターは都市緑化への協力を努めながら、造園、園芸技術の研究、研修会の開催、自然と環境問題の調査、国際交流の推進などをテーマに活動しています。関心をお持ちの方、主旨にご賛同の方はぜひご参加下さい。

	入会金	年会費
個人正会員	10,000円	10,000円
団体正会員	50,000円	30,000円
賛助会員	30,000円	20,000円
友の会	免除	3,000円

◎ ご寄付のお願い

当センターの活動をさらに活性化させるため、広く皆さまのご支援を賜りたく、ご寄付をお願い申し上げます。

◎ ご寄付 301,532円(みどりの箱寄付を含む)

◎ 新入会員のご紹介

個人正会員 二見恵美子 木田幸男
 団体正会員 株式会社 美交工業
 友の会会員 小林美代子 中谷善信 中村隆子

NPO法人 国際造園研究センター

〒540-0021 大阪市中央区大手通1-4-2 大手通第三ビル202号
 TEL/FAX : 06-6944-2040 http://www.klrs.org/

NPO法人 国際造園研究センター会報

No. 11
 2014
 6月発行

庭園見学 山口県 の庭園文化を尋ねて

枯山水の幻の名庭「月の桂の庭」 毛利氏庭園 / 常栄寺 雪舟庭

秋もたけなわに差し掛かる11月10日。久しぶりに京都を離れ、繁村誠人専務理事の案内で、山口県下での研修会となりました。

最初に訪れたのは、通称「月の桂」として著名な桂家(右田毛利家の家老職を世襲)の庭園です。枯山水に類別される庭園と云えなくはないが、通常の縮景タイプの庭園とは全く異なり、配石・石組は一切、様式を踏まえていません。二段重ねの石組が2箇所あり、その1つが南庭と東庭が重複する位置にL字型の大石を載せた石組となっていて、これがこの庭園全体を象徴しているようです。旧暦の11月23日(新嘗祭の当日)深夜に月(下弦の月)がこの大石の上(即ち南東の空)に昇る時刻に月を拝する催し(桂家代々の最も大事な行事)が行われるそうです。桂の樹は中国では「月中にある樹木」として重視されてきたという故事に基づき、月と桂(姓として名乗っている)との関係から桂家独自の神事(?)として継承してきたものと推察されます。こうしたことから、従来の庭園とは全く異なった自然観・宇宙観に基づいた空間であることには間違いのないようですが、何故、石を重ねるデザインとなったのか、また他の石組・配



石との関係等、理解し難い点も多いです。ただ、近くの山の斜面には、屹立して露出した大きな岩が随所に見られ、中には、重ね合わせたような露岩も所々に見られることから、地域の風土特性を表象した空間であるとも云えそうです。

次は、毛利氏庭園です。明治から大正時代にかけて造営された大規模な池泉回遊式庭園です(約8.5ha、国指定名勝)。海(三田尻湾)を望む高台にあり、流れを導き、地形を活かし、巨木・巨石を多数配した実に豪快な庭園です。江戸時代の主だった大名庭園と同等程度の造りで、一定の評価は得られるでしょうが、明治・大正と云う時代背景や、地域の歴史、文化・風土特性との関連が物足りないです。また、借景となるエリアが、ほぼ市街地化し、海を望めないのも残念です。

常栄寺の庭園は室町時代の中期、雪舟の作と伝えられる極めて著名な庭園で

す。最初は、周防・長門の他、北九州を版図にしていた大大名の大内政弘の命により、その別荘として造営され(館は無く、庭園のみ)これが後に常栄寺の所有となったものです。西の京「山口」を代表する庭園で、全国的にみて、極めて特殊な庭園です。枯山水のエリアと池泉のエリアからなる庭園ですが、主体はどちらでもない。と云って、双方が溶け込んでいるとは云えず、逆に違和感を生じてもないという絶妙のバランスを保っています。この理由は幾つか挙げられます。

全域に渡って、配石の数が多く、かつ均一的、散在的に配置されていること
 池の護岸石組が目立たないこと 正面の滝石組以外、縮景等による具象的な石組等がほとんどないことです。加えて、方丈に面する枯山水のエリアでは、角張った石を「平天」にキッパリ据えた石組等、平天の石・石組が目立ち一般的にはこの点が当庭園の特色とされている ますが、これが枯山水エリアに留まらず、池中にも随所に見られます。こうした石の扱いが全域に拡がり感と統一感をもたらすとともに、訴求性の強い庭園になったものと思われる。

「平天」... 石の平らな面を上にして、テーブルのように据えること。

(吉田 昌弘)

